

台湾魅力発信 vol.6

## 早川友久・李登輝元総統日本人秘書インタビュー

慶應義塾大学 SFC 研究所 上席所員 寺山学  
(元日本台湾交流協会台北事務所総務室長)

2018年から2019年にかけて『交流』において連載した「台湾魅力発信」シリーズを今号より再始動。台湾各界において影響力のある方々を取材し、政治、経済及び文化など様々な分野から見た台湾の魅力について発信していきます。今号では、昨年7月30日に逝去された李登輝元総統の日本人秘書として、8年にわたり李登輝元総統にお仕えされた早川友久氏を取材。側近として間近で接してこられた李登輝元総統の素顔や李登輝元総統が生前日本人に伝えなかったこと、そして李登輝元総統の遺志を継ぐ財団法人李登輝基金会の今後の活動などについてお話を伺いました。

- ・インタビュー実施日 2021年7月16日
- ・インタビュー実施場所 財団法人李登輝基金会

## ＜早川友久氏略歴＞

1977年、栃木県足利市生まれ。早稲田大学卒。

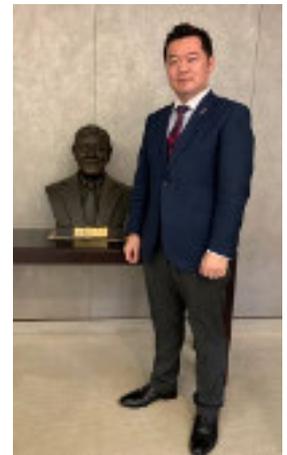
2002年、台湾を初訪問した際に目撃した台湾の選挙活動に感動を覚え、台湾に対する関心を抱く。同年発足した「日本李登輝友の会」の青年部長に就任。

2003年、金美齡（元総統府国策顧問）事務所秘書に就任。

2007年、台湾大学法学部へ留学。この間、李登輝チームの一員として活動。

2012年、李登輝事務所秘書に就任。以後8年にわたり日本担当の側近として李登輝元総統の活動を支えた。

著書に、『李登輝 いま本当に伝えたいこと』（ビジネス社）、『総統とわたしー「アジアの哲人」李登輝の一番近くにいた日本人秘書の8年間』（ウェッジ）、『オードリー・タン 日本人のためのデジタル未来学』（ビジネス社）、翻訳書にオードリー・タン著『オードリー・タン デジタルとAIの未来を語る』（プレジデント社）。



## 李登輝元総統逝去からの一年を振り返って

— 李登輝元総統の逝去から、まもなく一年となりますが、この間を振り返ってどのように感じますか。

早川氏 まもなく一年となりますが、今振り返っても、李登輝という人間の下で学ぶことができたのは、自分にとって大変な財産であり、また秘書としてお仕えした8年間は本当にかげがえのない経験であったと感じます。実際、李登輝元総統が逝去された際の各国メディアの報道振

りは、自分の想像を遥かに超えるものでした。台湾や日本だけでなく、世界中のメディアで大きく取り上げられ、逝去のニュースが世界を駆け巡ったことを目にし、改めて李登輝元総統が如何に世界で尊敬され、愛されていたのかを強く実感しました。

一台湾人の中には、李登輝元総統の逝去によって、李登輝元総統が台湾にもたらした民主主義の遺産の大きさを再認識したと話す人もいます。

**早川氏** 李登輝元総統は、台湾の民主化後に逝去された初めての総統（注：総統としての実質的な権限を持たなかったとされる嚴家淦元総統は1993年に逝去）となりますが、李登輝元総統が亡くなられた後の台湾社会の動静は、李登輝政権を経て台湾が民主化した、或いは民主主義が台湾社会に深く根付いたことを如実に示すものとなりました。具体的には、まず言論の自由が挙げられます。過去の総統の逝去時とは異なり、李登輝元総統が逝去された時には、その功績を評価する言論とともに、李登輝元総統を直接批判する様な言論も一部で見受けられました。こうした権力者に対する批判が許容される、言論の自由が担保される社会となったのは、正



李登輝元総統ゆかりの地①：生家「源興居」  
(新北市三芝区)

に李登輝政権の成果なのだと思います。

また、過去の総統の逝去時には、国が国民に喪に服することを強制し、それによって市民生活に大きな影響が生じていました。1988年に蔣経国元総統が逝去した際は、台湾人である自分の妻も学校の指示で、蔣経国元総統の遺体が通過する沿道で跪くことが強制されました。それが、李登輝政権を経た今日の台湾では、李登輝元総統が亡くなられても、国が国民に喪に服することを強制することもなければ、学生に跪くことを強制するようなこともなくなったのです。

さらに重要な変化として、かつての権威主義時代においては、総統が亡くなると、一般市民は「この先この国はどうなってしまうのだろうか」との強い不安を感じる事が常でありましたが、李登輝政権を経た今日の台湾では、元総統が逝去しても、国家機能や民主主義が正常に機能し、市民の日常生活は至って平穏なままです。これこそ李登輝元総統が目指した民主主義台湾のあるべき姿なのだと思います。つまり、元首が亡くなくても、台湾は台湾として存在し続けるのです。

## 間近で見た李登輝元総統

一早川さんが李登輝元総統の秘書を務められた8年間は、ひまわり学生運動や民進党政権の発足など、台湾情勢が目まぐるしく変化し、台湾人の間で中国大陆との関係拡大への拒否反応や台湾人意識が急速に高まった8年間であったと思います。こうした台湾をめぐる情勢の著しい変化を李登輝元総統はどのようにご覧になっていたと考えますか。

**早川氏** 自分がお仕えした8年間は、李登輝元総統が一貫して目指してきた「台湾は台湾として存在し続ける」との方向性がより一層明確になった8年であったと思います。実際、国立政治大学選挙研究センターが毎年行っている調査



李登輝元総統ゆかりの地②：「真理大学」  
戦前は李元総統が通った淡水中学校のキャンパスだった  
(新北市淡水区)

結果からも明らかなおおり、この間に多くの台湾人が中国との間で距離を感じるようになり、台湾人アイデンティティが一層の高まりを見せました。その意味で、李登輝元総統は、かつて中華民国を「外来政権」と表現しましたが、中華民国という名称は別にしても、実態面では「台湾は台湾として存在し続ける」状況が着実に進展したと言えるのだと思います。実際、李登輝元総統は、蒋介石時代の「中華民国来台湾（中華民国が台湾に到来）」を「中華民国在台湾（中華民国は台湾に在る）」へと方向転換させましたが、現在の蔡英文時代においては、更に一歩進んで「中華民国是台湾（中華民国は台湾である）」へと深化しているようにも見受けられます。

—李登輝元総統は、総統在任中に生じた「野百合学生運動」や2014年の「ひまわり学生運動」など学生の政治運動に対して同情的であり、また日本との関係でも学生との交流を特に重視されていましたが、李登輝元総統が日台の若者に対して期待することは何であったと考えますか。

早川氏 李登輝元総統には、「人間生まれてきたからには、公のために尽くすべき」との強い信念があり、若者に対しても「公のことを考えて欲しい」との思いを抱いていました。実際、李

登輝元総統がかつて農業経済を専攻したのも、幼少期、地主であった実家に毎年小作人たちが「来年もお願いします」と出向いて来る光景を目にし、何故同じ人間なのにこれほどの格差が生まれるのか、苦しんでいる農民の手助けになりたいと考えたことが契機となっています。だからこそ、将来の台湾を担う若者には、自身と同じように公のために尽くす志を持って欲しいと願っていたのだと思います。

学生との関係で特に印象に残っているのは、「ひまわり学生運動」が起こった際、運動に参加した学生たちを熱心に支援していた李登輝元総統の姿です。実は、あまり知られていませんが、李登輝元総統自身にも学生時代にデモに参加した経験があります。戦後、李登輝元総統が台湾大学に編入した後の1947年のことですが、北京大学女子学生暴行事件（注：1946年12月24日に当時北京大学に所属していた女子学生が、米兵によって暴行を受けた事件。事件後、北京のみならず天津、上海、南京など中国各地で反米デモが勃発し、台北でも学生によるデモが行われた）に端を発した反米学生デモに学生リーダーの一人として参加していたのです。そうした自身の経験があるからこそ、総統在任中



李登輝元総統ゆかりの地③：「台湾師範大学」  
戦前は李元総統が通った旧制台北高等学校  
(台北市大安区)

に直面した「野百合学生運動」や2014年の「ひまわり学生運動」に同情し、現状を変革しようとする学生たちの積極的な姿勢に期待を寄せたのだと思います。

また、李登輝元総統は、日本の若者との交流の機会を大変重視していました。日本の若者が面会を希望すると、志を持つ日本の若者を激励したいと言って、どんなに忙しい時期でも進んで面会に応じていました。今振り返って、自分が印象深く覚えているエピソードは、ある時、李登輝元総統と面会した日本の若者が、「日本の若者は政治に関心を持っていないが、若者の政治への関心を高めるにはどうしたらいいか」と質問したのですが、李登輝元総統は大変驚いた様子で「そうなのか。日本の若者は政治に関心を持っていないのか」と逆に質問を返していたことです。李登輝元総統との面会を望む日本人の若者は、一様に高い志を持つ若者ばかりであったことから、日本の若者が政治に無関心だというのはどうしても信じられなかったのだと思います。

## 李登輝元総統が日本人に伝えたかったこと

—2018年6月に行われた沖縄訪問は、李登輝元総統にとって最後の訪日となりました。当時、健康状態の悪化が伝えられる中での訪日でありましたが、李登輝元総統がそれほどまでに沖縄訪問にこだわった背景には如何なる思いがあったと考えますか。

**早川氏** 当時、体調不良を押してまで訪日した背景には、李登輝元総統の「執念」のようなものがあったと感じます。そもそも、2018年の沖縄訪問は、「台湾人戦没者慰霊碑に揮毫して欲しい」との依頼を受けた李登輝元総統が、「揮毫だけでなく、自ら訪問したい」と主張され、急遽決まったものです。ただ、訪日直前に入院するなど、当時健康状態は芳しくなく、関係ス

タッフも訪日の断念を検討すべきだと考えていましたが、当の李登輝元総統は「どうしても訪日したい」と譲らず、最終的に本人の意思を尊重し、訪日を決行することとなったのです。

この李登輝元総統の「執念」とは、第二次世界大戦で日本人として国のために戦った台湾人戦没者を慰霊したいという李登輝元総統の一貫した思いです。これには戦争で犠牲となった兄李登欽さんの影響があるのかも知れません。こうした強い思いがあったからこそ、李登輝元総統は台湾人戦没者慰霊碑の除幕式に自ら出席することを譲らなかったのだと思います。実際、李登輝元総統が、「摩文仁の丘（糸満市平和記念公園）」には、朝鮮人や他国の戦没者慰霊碑はあるのに、台湾人戦没者の慰霊碑は存在しない。何としても台湾人戦没者の慰霊を実現しなければならない」と話されていたのを印象深く覚えています。

—李登輝元総統が日本人を前に行った最後の講演となった2018年の台北市日本工商会主催の講演会では、ステージを去る直前に再度マイクを握り、「皆さん、日本と台湾のために奮闘しましょう」と呼び掛けられていたのを印象深く覚えています。これが日本人に向けた最後の言葉となりましたが、李登輝元総統はどのような気持ちでこの講演に臨まれたのでしょうか。また講演を通じて日本人に何を伝えたかったのだと考えますか。

**早川氏** 今振り返っても、李登輝元総統は日本人に対して本当に特別な接し方をされていたと感じます。この時の講演も、先ほどの沖縄訪問時と同様、スタッフから「体調を考慮して中止した方が良い」との意見が出る中で、李登輝元総統は「台湾にいる日本人に伝えなければならないことがある」と言って譲りませんでした。自分なりに解釈すれば、李登輝元総統がそこまでして日本人に訴えたかったこととは、台湾という存在の重要性を日本人にもっと理解して欲し



李登輝元総統ゆかりの地④：法覚寺慰霊碑  
第二次大戦で犠牲となった台湾人の慰霊  
碑、李元総統が揮毫（台中市北区）

いということであったと思います。李登輝元総統はかねてより、「日台は運命共同体である」と発言されてきましたが、台湾を守れなければ日本も生存の危機に直面することになる、日本と台湾はそうした関係にあるということを日本人に訴えたかったのだと思います。

講演の終わりに李登輝元総統が行った「皆さん、日本と台湾のために奮闘しましょう」という最後の呼び掛けには、その場にいた多くの日本人が心を打たれたことと思います。同時に、この訴えを傍で耳にし、自分は改めて李登輝元総統は「千両役者」であると感じました。李登輝元総統は、自身が日台関係において大きな影響力を持つ「李登輝カード」であることを客観的に捉えていたように感じます。だからこそ、自身が日本人に訴えかければ、日本人は動いてくれると考えていたのだと思います。台湾では「李登輝元総統は日本の肩ばかり持つ」と批判的に見る向きもありますが、李登輝元総統からすれば、自身が目指してきた「台湾は台湾として存在し続ける」ことを実現するためには、日本の協力が不可欠であり、そのためには日本人

に働きかけなければならないと考えていたのだと思います。やはり、李登輝元総統らしく、感情論に流されることなく、冷静かつ客観的な判断の上で行動されていたのです。

## 李登輝元総統の意志をどのように継承していくか

一財団法人李登輝基金会は、先般新体制（注：基金会董事長に李安妮氏（李登輝元総統次女）、同執行長に鄭睦群・淡江大学助理教授が就任）の発足を発表しましたが、この新たな体制の下で、今後基金会としてどのように李登輝元総統の意志を継承していく考えですか。また具体的にどのような活動が予定されていますか。

早川氏 これまで李登輝基金会の主な業務は、李登輝元総統の身の回りのお世話であり、基金会は正に李登輝元総統がご健在であることを前提とした組織でした。そのため、李登輝元総統は世を去られましたが、引き続き日台関係の強化を主要な柱として、学術や文化、芸術、スポーツなどの交流活動を進めていきたいと考えています。

もうひとつの主な活動として、「李登輝総統記念図書館（仮称）」のプロジェクトが具体的に動き出しています。詳しくは李登輝元総統の一周忌である7月30日の前日に記者発表をする予定ですが、既に政府の支持も得ています。図書館の設立場所は、旧台湾大学社会科学院キャンパス（注：日本統治時代の台北高等商業学校。台湾大学のメインキャンパスがある公館からは少し離れた MRT 善導寺駅の近くに位置する）を利用することが予定されています。このキャンパスは、李登輝元総統が戦後台湾大学の教授時代に教鞭をとっていた場所であり、李登輝元総統のゆかりの地として、図書館設立の最適な場所だと考えています。また、名称は図書館ですが、李登輝元総統の蔵書のみならず、



李登輝図書館予定地：旧台湾大学社会科学院  
戦前は台北高等商業学校  
(台北市中正区)



旧台北市長官邸  
(台北市中正区)

李登輝元総統の功績を展示するコーナーも設ける予定であり、実態上は「李登輝記念館」といった形になるかと思えます。李登輝元総統のお墓は、軍が管理する墓園にあり、事前申請しなければ訪問できないことから、この図書館が多く日本人にとって李登輝元総統を偲ぶ場所になってくれたらと願っています。台北の中心部に位置し、MRTの駅からも近いことから、図書館完成後には是非多くの日本人に訪問して欲しいと思えます。また、図書館の設立が予定される旧台湾大学社会科学院キャンパスの向かいには、旧台北市長官邸があります。ここは、李登輝元総統が台北市長時代に市長官邸として実際に住んでいた場所です。現在は市長官邸の役目を終え、喫茶店兼イベントスペースとして一般開放されているので、図書館訪問時に併せて訪問されても面白いかと思えます。

図書館の設立以外では、今年はコロナの影響もあり、なかなか自由に活動が行えないのが実態ですが、今年の下半期には李登輝元総統がこよなく愛したゴルフに因んで、李登輝基金会主催で「李登輝メモリアル日台交流杯（仮称）」を開催することも構想中です。また、来年以降になりますが、李登輝基金会と台北日本人学校との共催で弁論大会を行うことも計画しています。

さらに、来年7月頃になると思いますが、李

登輝基金会主催で国際シンポジウムを開催する予定です。来年のテーマは「日台断交50年」です。1972年の国交断絶は不幸な出来事でありましたが、断交後の50年を通じて日台がより良好な関係を築いてきたのも事実です。その中で李登輝元総統が果たした役割は大変大きなものがあったと思えます。こうした観点から、日台双方の関係者が参加する国際シンポジウムの開催は非常に有意義だと考えています。また、来年は豪州にとっても台湾との断交50年に当たるため、場合によっては豪州などの関係国から参加者を募ることも一案だと考えています。

最後に、ソーシャルネットワークワーキング（SNS）上には李登輝元総統の生前からファンサイトのようなものがあり、数千人が参加していました。せっかくなので、今後もこれらのSNSを通じて、李登輝元総統の考えを伝えていきたいと考えています。実際、6月4日に日本が支援した最初のワクチンが台湾に到着した際には、李登輝元総統のFacebookアカウントを通じて、中国語と日本語で日本への感謝の気持ちを表明し、大きな反響がありました。李登輝元総統の考えを伝えていくとの観点から、今後ともこうした発信を積極的に行っていきたいと考えています。

（編集・写真：寺山学）